キリストによる自由　　2020.12.13

クリスチャンが持っている自由は、キリストとの関係の中から得た自由だということ、つまり、私たちが持っている自由の源はキリストとの関係だ。ガラテヤ１章と２章を読むと、パウロは14年の間に、2回エルサレムに行った。14年ぶりに、パウロが再びエルサレムに上った理由は、使徒11:30に書いてある飢饉と救援物資を送ることに関係している可能性がある。パウロ自身の異邦人に対する伝道の働きについて、エルサレム教会と話し合った。彼は二つのアジェンダ(計画)を持っていた。
１.エルサレム教会に彼の異邦人に対する伝道の働きを認めてもらうことについて。
２.エルサレム教会が異邦人の信徒を受け入れ、異邦人信徒をもっと理解することが重要だ。
それによってエルサレム教会が律法厳守を無理強いする、割礼を受けいれなければならないなどという、真理とは逆にある要求をする状態から変わってほしいということだ。

ガラテヤ書の中に、自由という言葉は三回出てくる。2章4節、5章1節の「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました」、5章13節の「兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです」です。3回も示したのは、キリストとの関係があるからこそ、自由があるためだ。ガラテヤ書には幾つかのテーマがあり、律法、恵み、信仰、自由と聖霊です。5章1節の「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました」は、ガラテヤ書の中心節だ。

現代社会が言っている自由

辞書から：自分の意のままに振る舞うことができること。 勝手気ままなこと。わがまま。哲学で、消極的には他から強制・拘束・妨害などを受けないことをいい、積極的には自主的、主体的に自己自身の本性に従うことをいう。法律の範囲内で許容される随意の行為。

時事評論家から：「現代人は、自由という言葉が好きだ。何かというと、すぐ、自由、自由と言いたがる。そして、自由になりたいと叫ぶ。しかし、どれだけの人が、自由の真の意味を知っているだろうか。自由主義。自由経済。言論の自由。ちまたには、自由という言葉が氾濫している。大多数の人は、自由という言葉を、自分勝手に解釈し、自分の都合のいいように、使っているのである。」

ネットの調査から：「大人は子供より自由か」ということに関する意識調査だ。「子供の頃は、親に押し付けられた価値観の中でしか生きられない。それが育ててもらうことでもあるのだろうけれど、窮屈に感じることも多かった。」「行動とかはかなり自由になったと思うけれど、精神的な部分は縛られている感じがする。大人になれば自由を得る代わりに、大きな責任がつきまとう。それに疲れてしまった人が、心の自由を奪われてしまうのかもしれません。

それは、パウロが指している、クリスチャンが持っている自由と同じものではない。聖書の中の自由は決してわがままではない。ガラテヤ5:13、「ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい」。聖書には、わがままは自己中心であり、罪の影響の結果だ。ヨハネの手紙 第一2:16に、「世にあるもの」というのは、悪いことであり、罪のことで

す。「すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」肉の欲望も、目の欲望も、暮らし向きの自慢も、わがままのことだ。
聖書の中で、**自由は三つのことを示している：**
１.自由は解放されるということである。
２.自由は真理である。
３.自由はやらなくてもいいことを選択することである

1.キリストイエスによる自由とは解放されること
ルカ 4:18-19、「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」虐げられているとは、抑圧や圧迫などにより苦痛を与えられていることだ。イエス様はこういう人々に自由の身になることを告げるのだ。その自由は、縛られている状態から解放されるということなのだ。

パウロはエルサレムが彼とバルナバとテトスを奴隷にしようとしてることに反抗した。「奴隷にしようとする」とは、「律法の奴隷に」ということだ。ユダヤ人の律法を守らせたり、割礼を強いたりという、押し付けがましい要求を、「信じる」ということの上に、付け加えていくということだ。

クリスチャンになるのは、この世の色々な縛りや、罪の縛りから、律法を守らなければならないという縛りに移っていくことではない。すべての縛りから、解放されることなのだ。パウロはこの縛りがあることを強く否定した。福音を頂くと、罪の縛りから解放され、この暗闇の世界の悪勢力の縛りから解放され、人間関係の中の恐れから解放されます。
福音書の中にあるイエス様によって人々が解放される場面
・井戸の傍らに来たサマリアの女(ヨハネ 4：5-30)
・ベテスダと呼ばれる池にいた 38 年も病気にかかっている人(ヨハネ 5:1-9)
・生まれてから目が見えない人(ヨハネ 9:1-7)
・ゲラサの汚れた霊につかれた人(マルコ 5:1－20)
イエス様は、私たちを罪の縛りから、この暗闇の世界の悪勢力の縛りから、圧迫の苦しみと寂しさから、絶望や無理な非難から、律法主義から解放される。

2.キリストイエスによる自由は真理である
キリストによる自由と言えば、ヨハネの中で、イエス様が自由について語った御言葉を思い出す。ヨハネ 8:32、35-36、真の自由とは真理に支持されるところにある。真理こそ自由の掟なのだ。真理とは、科学的、哲学的などの原理ではなく、また、いわゆる宗教的な真理など、といわれるようなものでもない。真理とは、イエス様の救いによる、罪からの解放の原理だ。私たちは罪の虜なのです。罪から解放されて初めて自由となる。ですから、イエス様の救いを受け入れると、罪の奴隷から、神様の息子に戻ることができる。そうすると、自由になる。

聖書が語る真理は人間の学問的な探求によって発見することが出来るものではないし、ましてや、図書館にこもって勉強することによって、得ることが出来るものではない。聖書を読めば読

むほど、神様に対する理解と知識が増えていくはずだが、救いから頂く解放や、イエス様による自由は信仰によって得るものだ。イエス様の身代わりとよみがえりを信じ、自分の罪を認め、悔い改め、神様の御前に戻ると、神様の子どもという身分、というアイデンティティを取り戻すことができる。

私たちは本来、罪の奴隷だ。頂いた選択の自由を誤用してしまい、罪を続けて犯してしまう罪だらけの生活が本当の自由とは言えない。本当の自由は、人間の学問から得られるものでもない。キリストによる自由はイエス様の十字架の救いの真理を知り、神様の子どもであり、神様の御前にいつも行けるという自由だ。
私たちは、自分が神様の子どもという身分を受け入れましたか？
神様の息子、神様の娘であるというアイデンティティとそのアイデンティティを示している力をどのくらい理解しているか？
さらに福音を正しく理解できるように、毎日すこしだけでも聖書を読みましょう。